君は、君の魂が肉体から出ていかないように、自分で自分の魂を肉体から外に連れ出すようなことをしてはならない

そのようにして出ていくばあいには、君の魂はなんとか出ていくことができるようにと、なにかを携えて出ていくであろうし、そのばあいの「出ていくこと」は、「他の場所へ歩を移すこと」と、なんら変わりはないであろう

そのようなことをしなくても、魂は「肉体が自分から完全に離れ去る」のを待っているのであって、その時がくれば、場所を変える必要はなく、完全に肉体の外に出ることになるのである

では、肉体は魂から、どのようにして離れ去るのであろうか。肉体の調和が

——肉体はこの調和を保つことによって、魂を持っていたのであるが——

もはや存在せず、そのために、肉体はもはや魂を自分に縛りつけておくことができなくなって、魂のいかなる部分も肉体に拘束されない状態になった時に、肉体は魂を離れるのである

では、もし人が工夫をこらして、肉体が死滅するようにしたとしたら、どうであろうか

そのばあいには、彼は無理に死を強いたのであって、自分自身は肉体から離れたけれども、肉体の方は魂を見捨てたわけではないのである

つまり、肉体を死滅させるばあいには、魂は情念からは自由になれず、不愉快さや苦しみや怒りがつきまとうのである

人は決してそのようなことをしてはならない

では、もし自分が理性を失い始めていることに気付くなら、どうであろうか

おそらく賢者のばあいには、そのような事態にならないであろう。だが、たとえそのような事態になっても、彼は自らの肉体を死滅させることを、<已むを得ざること>のひとつと、つまり<無条件に選択されるべきことではないけれども、状況によっては選択されるべきこと>のひとつとみなすであろう

まことに、魂を肉体から脱出させるために薬を用いるのは、魂にとって有益なことではないといえよう

それに、もし各人に与えられた時間が運命によって定められているのであれば、われわれの言うように、已むを得ざることでない限り、その定められた時のくる前に魂を連れだすのは、エウデュケス（よいこと）ではない

また、もし各人が肉体から出る時の状態に応じて、あの世界での順位を持つとすれば、なお向上の可能性のある限り、魂を連れ出してはならない